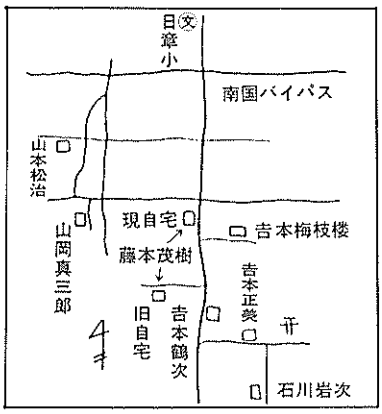
〝田村〟で生まれた農業機械……②

藤本茂樹（田村）

山本松治氏も籾摺機の改良に日夜没頭していた。当時の昇降機はバケットが一列であった。山本氏は内部に仕切りをして二列にし、これの特許を取った。このアイデアは吉本梅枝楼氏のものであったが、山本氏に先に特許を取られてしまった。

山本氏から発明の苦心談をたびたび聞かしてもらった。

この当時、協和農機㈱初代社長の楠瀬慶吉氏も、山本氏のところへ大工として来ていた。井関農機㈱初代の社長井関国三郎氏も、山本氏の籾摺機の取り売りをしていた。昇降機の中を仕切り二列にする特許は、大変有利であり、他の者は上の方にギアを付け苦心していた。山本氏は、万石にも逆方向に風を送る特許をとっていたので、これらを組み合わせた籾摺機は他を抜きんでて性能が良かったので、大いに業績を伸ばすこととなった。



土臼では四百俵で取り換えの必要があった。吉本正美氏は、近所で作る籾摺機を買って、農家の賃摺を行っている者三名の土臼を作ろうと考え、吉本梅枝楼氏の工場に手伝いに行ったが、土臼製作の部屋にはだれも入れない。そこで、苦心して製法を手に入れたそうだ。製法はまず、竹篭を編み赤土に食塩を入れ、籾がらを適当に混ぜ、樫の木を約三㌢の厚さに割り適当な間隔に差し込んで固めたもので、籾がらを入れるのが秘密であったとのことである

吉本梅枝楼氏は、土佐のいごっそうそのもので、農事試験場で農機具の実演展示会があったとき、籾摺機を出品しても白木のままであり、山本松治氏はニスを塗りラベルをはってあるので、人々の目を引いて人気があった。吉本氏は性能が良ければ塗る必要はないと頑張っていたが、売れ行きはだんだんと山本氏に傾いていった。

石川岩次氏も間もなくやめ、吉本鶴次氏も定年を過ぎての農機具製作であり、後継者がなかったので吉本鶴次氏が亡くなるとやまってしまった。

山本氏もやがて朝鮮に行くようになるが、その少し前、楠瀬慶吉氏ら三名の者が山本氏から離れて、出身地である三和の里改田にて農機具を作り始めた。これが協和農機㈱の始まりとなった。

山本氏は朝鮮に行くとき、特許を井関国三郎氏に売ったので、井関の籾摺機は大変有利であった。後免の依光鉄工所、甲藤鉄工所等も、やや遅れて籾摺機を作っている。

二重胴脱穀機の最初の発明者は吉本梅枝楼氏である。吉本氏の長男が私と小学校が同級であるが、その話によると、吉本氏が脱穀作業をしていると近所の者が見ていて「おんちゃん上でも回したら、倍早よう仕事ができらあよ」と言ったので、はっとヒントを得て二重胴脱穀機を作ったそうである。

（おわり）

（注）吉本正美氏は昭和五十九年、数え年八十四歳で亡くなっています。

《市民の声》

ハト対策どうなった

問い・市政についての座談会で、ハエ対策もよいが（シンポジウム）ハト対策はどうなっているか。

（一市民）

回答・ハトを含めた農作物の食害及び環境汚染などを引き起こす有害鳥獣の駆除については、関係機関（南国市、関係農協、南国地区猟友会）の駆除に対する意見書と鳥獣保護員の被害状況、調査所見を添えて高知県知事に捕獲許可申請を行えば駆除できます。

現在、南国市では年間に約十件の申請が出されており、すべて許可されている現状です。

捕獲方法は銃砲、網、ワナなどがありますので詳細については左記までお問い合わせください。

南国市役所産業経済課☎㊸2111内線225、高知県中央林業事務所林産班☎㉑6202～6206、鳥獣保護員・久家豊一☎㊷1930、南国地区猟友会事務局（高村火薬店内）☎㊻2305

書きぞめ大会

と　き・1月5日(日)午前9時～
ところ・市立中央公民館
対　象・幼児から中学生まで。参加費は1人300円で道具は会場に準備してあります。
主　催・南国ライオンズクラブ